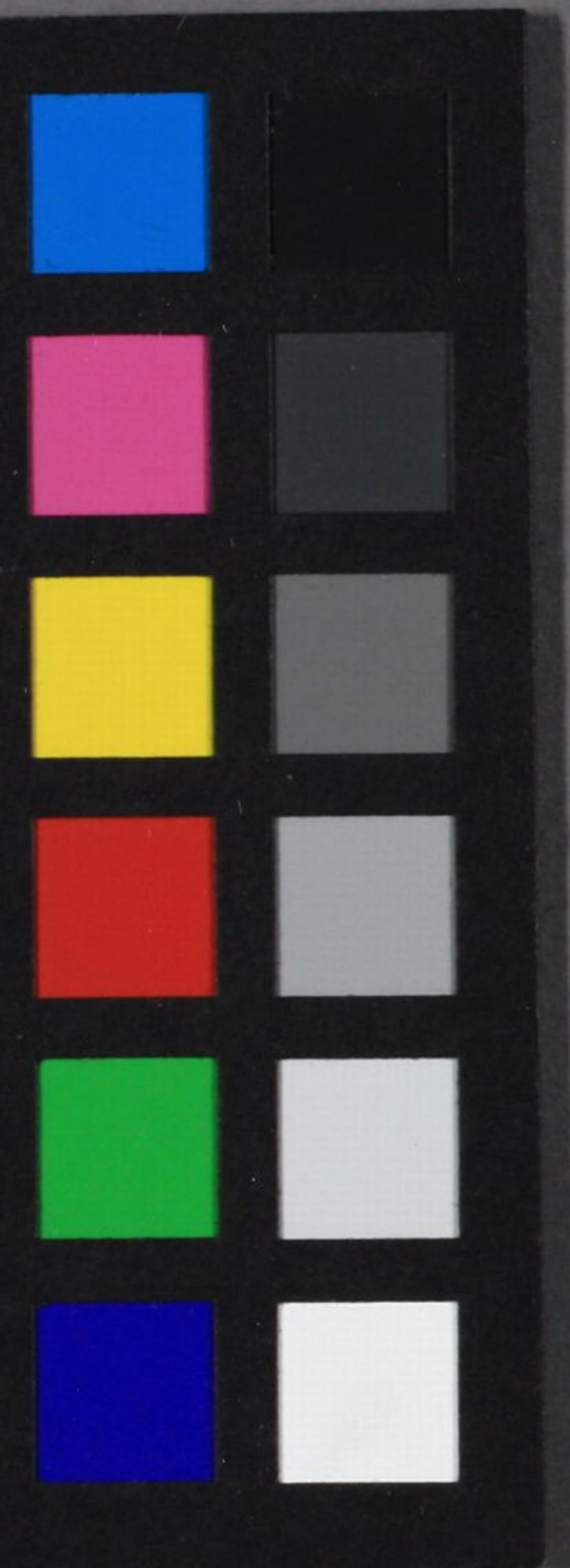


6  
5  
4  
3  
2  
1  
70  
8  
9  
7  
6  
5  
4

古今和歌集

以心烹生  
校订下



古今和歌集卷第十一

恋歌一

歌一  
歌一

やくめびとくやさき月のあやめ草はやめとちうぬ恋とすば  
るよのまくのあらむ詠よりいまとむそむる思ひよあひけぬじ  
よし豊にいと浪ちくひあのもやくぞくと、もひひと先とし  
あら浪のあとをさうにゆく、みと風ぞなうのあるがありうる  
かとを山などとすくつあおきうの闇のあすたにまとふるうお  
立くとあもれをぞ思ふよとと人よんとかまうつて、波  
芦中かくこそおれ吹きせの後ふとみ人とこひーかまくり  
右近のうすをのむとまの日、むりひたて、うする  
車の下すゞれど、女のかほ、のうよ見えされば  
よみくはうぢくさる

君はもあげみよせぬ人の恋りゆあやまくけよやあがくさん あひう



か庵一

あ。——らぬゆうあやまくきよ尾ひのことをあらざりうれ  
かをぐのやうとよよりせりうちは。物足よ生すうる  
女のひと。あとたづきて。つらをせりよる

春日堂のすまをかてちひびく。おのをつるよとおきみをも  
人のあづこあぐるはてよかども。そこ承りする人の  
りとに後よよみそつらをしきは

山ざくらのあとうのうみそみて。一人とあひが里され

歌一

たよりよとあぬ思ひのあやまとふとほくられり  
初原のをつらよおとすりやなよのとわとかくふのあ  
あことのえわるくよおるれむかとよつて恋つるふれ  
かとよとくみことひうかげをあひばんとひのをよとむ  
タぐもくのえのをとにわぞ思ふあすかふる人をよとむ

うすよりの思まれてあこと妹一すめやへ——ほすばべ  
ほまれよとやねくあらがのがとくあせくぬとい志のがん  
ちをやぶらがのやしきのゆでまにもと因を思とかくぬ日ひほ  
あ恋へむ歌をきよみちねじ思ひやれとぞ行くるもむ  
まらうが歌うたびうら涙なぬ日ひあれど思とくひぬ日ひほ  
タびくよさきよ思へのねのちのふるとぞ思ぬあひとまるうね  
ひりの山下みのあぐくきてなま角ふとせきぞうねほる  
す壁のいをぎくとほりあのがよひたてド恋へ志ぬと  
なまけの仲子とよとわりてふをあどきが恋の闇せとをあき  
山ちこちのあとのをよのとあがせてこひんあひた志ぬと  
思ひつるととくちの山のまつしをねとあせおきわと  
人をさげ思へぐくすりのまつむもひのいろよいとまむ  
林の聲のをもれよすりを喰むのをもよやこひんあひとど  
よううの梅のほづえよしるの林となまくぬきを思ときたる

アリの山野に見ゆるやゑよこひて川筋カワヌシにてよまる  
友なみばめとくすをぶるがやまのいつまでかオトロえなせん  
ゑせでとくじしのとくらをま神のうけたどあたぐらしと  
あたれとことども取べあはそくらをあらぶれのほりとよせむ  
界ふたものすらとおけけるをよへ出どとわいりあひと  
あゑのんあらがやあきたの枕のそこをあわだあるもうち先  
あちのものとーの原志のぶとく人あるもめやいふ人前へと  
人をまね思ひやあぞとわきのよぢらねと達よりれをき  
ちりともあともあをもりのあきやゆてとあくとくすひと  
いであと人あととくめだぶねのゆみたゆよわがよころと  
いせあうみよ約まるのよのうけあきやんをとくと定めかねつる  
併勢の海の聲ヨメのつとあを打ててくとのとや思ひよとん  
源流ヨウリュウあふとみくとたの毎日人の思ふとくのあすとありとを  
たゆらまを思ふとねむらむりゑやあひがあひらめやへ

翁をいたりぬ事務のきよのくまと思ひのあるせありて里  
町をも時あらきびわいためをひくれくねとのみを取く  
がれもやべきよあら時たりてあらと人ちあひーあ  
よひふよくうさざめもくよむねいりよ被りう夏よこえくも  
ゑりきよ命とからぬるべ事よやもくぞ阿もべくうける  
人の身とあらう物とあをばげてしきふんゑやーねよ  
志のぶきびくよくわとくあきび思ふてことたまよがくも  
こもすももやあをなむもめのまよはまよあきと音と思ひん  
はまとあきとくとて山元このまよはまよとあげきつるうふ  
れあよ教りくよくもくあきくちのぬんとちりふあをくう  
人とちりふくわねやオのまくよふたまくよきがくうす  
がひやまきくひくらりすあすやすむとくまくよあくのあき  
まくよあくよひのねくよも  
あひ志ねとまちばねにうじうをまのよもにすがうに夏よつるえづ

よとすとちよきばくとし道鏡かをとくないぎもあびてん  
まうそび消る砂のぼりなく君がこころもまれなよけさん  
あけたてお塚のをさむとさきとじよるに景のりえとほほき  
友實の身とひづくとあすととむとむの黒ひよりとあくと  
えみればとひづくとひづくとひづくとひづくとひづくと  
いつともとゑくとゑくとゑくとゑくとゑくとゑくとゑくと  
林の田のやよとととととととととととととととととと  
あらの田のわのうととととととととととととととととと  
人めりるあらわあやめをあらわあどりはよ出てゑぞーとあだ  
あらのたれをかてよふけつ家拘忌ひの志をあらば  
ちゆの志かのねをゆきふる雪のけねとうひもむゑの志をふ

## 恋歌二

歌あらば

思ひつねをやくのくつむ爰ととよせばさあばくすと

すまち

泪ぬくらあがるうきねよひ爰もくさうに泣くばと有り  
恋まきばゑ月のかげとあまにうさうして今まくのぬのゆゑ  
がと大わぬ月のあどもがく波の川ようすとありも  
くさびのかどとある月の月びきとたまがまで下にありこく  
ちやきせようめかひとが神のあまの海ようゑすとねと  
をきくよとすとぬふ崖の波のうよみざれてのこや恋波すさん  
わくらあさうぐへはのあく波のあくばや人とかくこひんとと  
人あきぬ思ひとほひよまるがなるやうのゆこそがおきりま  
とぶるの舟もきくとねれくぬのふうきと人々あくふまき  
あく波のよつけちもつがごくく人々ひきとねらうきるん  
崖の間とあがくいづくあいせでふよもひことまき  
うきとまのつとあげまろふちなきやふりきふとあるくみ  
おヨびとよむことまよ山表めあくぬ山わやどとぞ思ふ  
ふうとまのふちがく恋にくすと物と人下とふせま

うふねよゑむとくどりそしよりゆ先ておわしたのみうちでき  
いとせりてゑを財とうをもひよみれむとくとぞきる  
林うせの身よみり舟をつまむとくとだれもくすく船よ  
あわついづのちよ人の身をもたらる日。あんせの法の  
たうしよく、いづまざるかとど。まよよみくともの  
こすちがりあよつうとくりる

法めども袖よなまなまよひとくとくぬれあふごおりうり  
か風へ

わらうたる波ぞ袖よもくあへせ波あべなまけあきが  
寛平は時ききのまのす合のうと  
あさびくおねるあうよぢりよ爰めたぢりうはくちく舞  
すのほのかよまる派よるさくやゐあのがひちくめよくくも  
つぶゑにあまぐくれのまなまやあはきまなれども人のかき  
よひのまとわやみゆく友ちよまどひよまれる寒ちするふ

夕景を景すりけよかゆれどもわらすま秋をや人のは生あに  
さのなまおぐゑおどもむくうねうつが夜をとえまゆりきる  
ゑやのまくのりきねよがくあおの消くつまでだいりへかとくる  
河のせよなまく玉座のみぐくまく人すられね草もすらね  
かきくじあるもむきの下きくすよ江をてわ思ふはすあるけ  
ゑふる潤のとこよみちねきがくとほくとぞゑひなまうま  
志ぬる令きわやあらとんよもめとをほくとぞゑひなまうま  
えびねきひまひてゑんと思ふとほくとぞゑひ人だのめなま  
つまゆくもねくとぞくとぞくとぞゑひなまうま  
立おでいふたすきよびくなまへひまくひふくむれきかの名あゆめん  
ゑあゆゆくとくをがねもすあくひりうりえぬま

歌

よどくわよあがれだゆく波のよゆもうわくねおもねりうり  
爰路よもくぬやかくもよもたまくがよく袖のひじてからうね

よく  
かき  
たゞ  
くせ

ちうかく乞度（よこし）よしとん（よしとん）あらよ（あらよ）あーたの原（はら）おきとう（おきとう）がモク  
絶（絶）のあくととをせいかうらとものびよ袖（そで）とあらざるす（あらざるす）  
絶（絶）よおきてをもぢりども春雨（はるあめ）よねをあ神（かみ）ととをもあくすむ  
そら（そら）あくねやあれをほとぎに財（ざい）じともひく秋（あき）ただぐん  
あはき山梢（さんしやく）とたかにわくまほなくねをあるゑ（ゑ）とあるふ  
林務（はやし）のたる時（とき）あきとつづるよいたちねのえ（え）とおりやえめくよ  
むひごとこゑよたてばるねどと波（なみ）のことを下（した）になかるき  
見見みこのががのあ食（く）のうと

林（はやし）をみとよもまであく原（はら）よゑ（ゑ）とろぬや獨（ひとり）ねるより

歌（うた）一

あまの草（くさ）よみれ、嘗（なま）むきのをのちふきにあと思ふことわ  
をとつゝくわとがり、ば林（はやし）の田（たん）のいふをのとよとふ人のあき  
人（ひと）を思ふふらすよあれどきをよのみもあきこりてのうお  
林（はやし）をよかすあとのこゑよとくわふくへあひへがまむ

おこもうち波（なみ）のすゑあふれづよりあとにゆきくよらふ思  
ややかによけらる人（ひと）よきしけり

あえぬすがよ一聲（せい）の山（さん）のよひをくづくのうお  
やうひなうまに、物（もの）のうじきる人のりと、人（ひと）をま  
くせうとよとよとよみてはうちよも  
蟲（むし）をよねむきよおきとをくがせふくととに物（もの）のうじ

歌（うた）二

よもやくよくぶの山（さん）のよひをすれくちよと枝（えだ）にすけり  
えひゆのうくばうるきすゑおれややにあがれてゑよくよく草  
たまうとに袖（そで）とくわぬうた草（くさ）のうきたちゑとゑへすくわ  
よめよぬきとれ我（われ）はよかよ衣（い）かけて思（おも）ひぬ財（ざい）のまよ  
あぬのまやのキ山（さん）をりよ何（なん）く人とがりひとえりむ  
あきたくの枕（まくら）の下（した）に海（うみ）あれと人（ひと）とよおひがひすだわら  
身（み）とよきえぬ思ひ（おもひ）わあがらよきの枝（えだ）あやこわうりを

あれ  
かう  
魏（ゑい）  
そく  
かう

まくらをかくす  
ひきのみぞうふりとひこ星もゆゑでさせしよまくら  
くわいとよゑす  
せすとあしもむたのめとて命なしける  
ためめつてもとをよきよあまねふとくへづらをす  
いのちやいあよびのあざわとあまくが一びぢくふくよ  
恋歌二

やまとひめついたわより。あみびよびよねりひてゆちよ  
あみくがふまけふ。よそそはくをくらむ  
おせわせびねむせどよもとあじてとまのりのとてあがめくじつ  
葉午秋のふよけくら女めりてとくもつらくまく  
波瀬ぐめあくぎをよきよきる波瀬川袖のくぬまくまくよもせ  
かめ女よかくまくく下よともす  
あさみを袖にかくづくや波瀬のあさみをくわいためす

ひる とく まつめ ふら ま まづね

まがるにあらぬ山ありてはれくよまどもひでり  
紅めふもせつあくたまくとたわみをそちまきりけき  
あくまとうえく波もまくまがくくねまうほくひよまく  
支むせばゆうひまんやうくあまがりひよまくねくまを  
うをふけじねよこくまちふるのたえはせきさまとそくふく  
有りげよそらがきとすくわかみがつまくあまくへわづれとくま  
立すあがたがたのまじせかやせたあまくわとくひくあすくも  
ほのそのなよまめりのまよあらきとあまくへあまくらめや  
まよふまく月日よろもあくまうなまよすよよいひんね  
人志まぬ足しめくそつむくまよあらびきとばまれみをまよ  
あよいぞよしみをだみかとあく下にうよひてあくせきわと  
あとのまちひねよねひまきを正ぐふくうんづちあくう  
今よもやありとどくわちめりあらめらうまちてねまみたもくせり  
持うむがくとまくまくがれよまくまくまくまく

まゆき まゆき  
まゆき まゆき

よもぐあくきとそそをくへだてはせふひさみががくとかられ  
いたゞれりてはれぬるわゆるすくほきにせかがをましは  
あまぬよのあるちくちとはりをぶがまきとめにがむせりと  
あめのわくわくくがくと林本人かう歌あす。

林の聲よさかがれの神よりなわとをあゝよぞむらさうる  
みるめあきこくがれとうとおねをやかれあで巣はまなゆく  
あをすりあよひあけかがまの日のあぐくや念とはじと魚え  
をめのはきあくとくうれすう曉をうくうにものとせー  
ゆふことのをまかすよる波をきだらみそのとをうすりは  
がひてよも風よきだつ波かれやあくとあきれまづかうるん  
くち皆くよあまとはなる名取河をとととりてりくまくかうり  
はやなくてまたあき名の立田河をとでやまんのあくねくふ  
人へいきよがなき名のをうきくむじとくまん  
あまをまたにえをあき名へたまうへ人よがはせすとまへを

小町 宝手 たま 竹子 たま 竹子 あすけ あすけ はな

かんがーのる條つるをよんと志とあきて。もうまかよ  
ひたりのちのひをひはあてけもぐがどよもりとえ  
いりで。くまのくみよ。なびひる。なびあき形を  
まわべ。わくとさくはりて。らのをよ。若ことに。人を  
ふせく。ありうたきばいきど。えわちでおみく  
まく。よみてやうける

人をまねまうが。いちの間ちひよひ。うにうちとねくと  
歌く

ゑのぶきと夜と時をわけややまう自のいでとそそとれ  
あひてやれよ。ひとあふ故のゆはけをのひをもくとさん  
林よと名のとあむくわふといふことをおくぬむれと  
なむとひとひとをねむよ。あふんぐと林の歌をまを  
志のをのほぐりとあけゆゑがわむくと。あうぞうか。さ  
あけぬとてとたのひをくとを。ひをぬとひをかと

法を  
よし  
こまち  
えはな  
よし  
よし

寛平内時。まちにめのあのお食のう。

ぬとからぬより、だまきをあたまとすよゆをがちつ  
ひく

あの竹のこれを一みにまき、お門をすくねよゆをがちつ  
やまとけをくわうつらあせ、おれをまくわあうつまの、ゑ  
あくへげあけをゑがゑ立ぬ、きねかくかーとくんくんと  
くくへとがきらんと、あらまつるひ出で消てうねーき  
ふと

ふと  
ひく

徳ねる秋の夜とちゆねをくらめばいやをうねとあをやする業  
業平ねの、せのゑよまうとたとける時。亦家ふ  
主なる人よ、とみそくよあひく。又のけぐれ人やは  
まへなくも。思ひどるをうるあひふた。女のむねより、  
かこせたとまは

そやあくあやげくもがり石えびをくわうつりねてくわえてり  
ほん

かへー

ひく

かまくらのやみよまとひよきゆ先うほといせんへきだかくよ  
こよひ  
ぬをゑのやまくつがとくうむる夜に、いともあくさくはせを  
さよるく天とくらむ月うけよあひてとるをあひうるふ  
ゑが夜もくらあとたて、あよひあるこくとくふあひきとくは  
名取らせのほ本あくはせんとうあひくらむれん  
よのののののののくととたまのくととたてととぞ思ふ  
夜くらむとよと思つも、されのねすまのねいろよいはみか  
花あきやうとあひをくとくみ下み下ゆかひのもとくわれ  
まちをかのきよれり。おのじよおひをまきてける  
女のむとよもかこせたとる  
かへー

泣あら涙よ袖のそぼちをなほしがくさりよることあるきよま

紫しづく

うつよなことあらめと友よさん人めどりのうらがわ  
をとおき思ひゆにゆるとこむ愛ちとさばんへとふれ  
爰はれあらとやまとぬかくとてうつよひくらうくらうのあは  
わくとくわづみのたまれをかくと見なづくえこそゆくわ  
たまきあらきんと仰へとくわづみのせきとくもむらを

寛平古時。なまいのあやのあ食のあ

紅のいろよいいでかくまぬのをよりよひくこひくのすと

歌しづく

その池よもむくとまの隣よかくとよかくとくよもがる  
けのをつかく幼君のうとさもくあらへくまよといでなや  
山やがのちととのやまのがとよだ人のをくぐるがとひめやと  
あらう。あらん。あよみのうねめせとふんずく

立ち詠  
よし人  
よし人

このはあられもるよとほりがくみの先の漏よもとを枯葉で  
あらじめあらげよととくはくあられよとほりもとと思ふ  
下のえきよきがくもしゆのとたえてみれん人ふとくをそ  
よびゑとゑびくねと並行の山たちをぬれ色よぬねと  
おはうかゑ名とみかとて出あらよとうみべたもあすは  
まくとより又多く人ちあきゑと潤せきあひりしほうの  
風あら涼うれきとれねをきやねよあらまれくあまねべく也  
あられ。あら人のひもく。かきめりの人はうらく  
池よも名としむのとあきみがくとまれどあらよと  
あらこくいふのとぞらも名のたつとす一聲のいのなまけのと  
もくのとをもくとくかくさくにとおとやまもあらわや  
君よようこくうをいもよまえまみせまと山よもたちももく  
あもといをよくだよとてねがのとちとくは名のをよだく  
いせ

たゞいづば

みちのくせあきらのぬまのあらうとかつす人よおしやつまくす  
 あひしきひゑりとこともあくはしがとあそんをゆべらるる  
 いとあくみうちの中たありふじいこかとがりもす一やれ  
 るといびつまれずされすかみのめづとげゑくりゆうごゑ  
 爰よとひとゆひに足えどあきらかぢめうげよもづる者たちと  
 ふるゆくわのちはなたちかとがくこそいああじとあくとよりれ  
 いせのあまのねふ夕かよかつてふみゆよんとあくとよりれ  
 まくあなびく山のさくとむえれとおうねゑとあらうふ  
 ふとぞつと歌きものとがくしゆうすらめうやあくとがくさ  
 かきとても後をとあでえ茶のふくとも人のちりいゆうれ  
 あきらかにあちり歌ふあらせううとおひひとあくとくまき  
 寛平は時ときいのまのお食のうと

おりてふあとのものや林をとをふがくうな物よわくも

歌いづば

さむりよれりよきあくひのやうとせんじんうぢはちく一娘

又へうぢのたまむ先

ゑやこもあやゆむいざよしは枝の枝をもさび枝より  
 とあむといむむらりとみあ月のむけの有とけつてつるれ  
 月夜すねすとくはなはよぶあくすけりよびあとあは  
 んとまんねやとくはとくもされおとあひよおひおとくと  
 やさりわめこととくめとくめとくめとくめとく  
 あお立へよみてしが山神の頃石よさきらやすとけで  
 あはのまのあよだりよび山のうみをあひもととのみくと  
 あきよおのやまとよいあくねうおうおうとびあくよとく  
 みす壁の大石をくづかむちなみのあみよおあくよとく  
 かくちむねとくよせておひよくおうじよくかまくかまける

天の原やとどくちへゆりよと豈ふかうをさくらめのうひ  
あづさらむきのぶらまほひよとくがりふくよおとみふげん

あひあひ。あらへ。ひ先のうがどめ。あみのうねり。

たましもとれんす

支内ゆびきの糸とくもくと。けくと縦毛と思ふ  
あひあひ。くくよとみてまきけふとふむ。

黒人のきとく夜壁の志げくと。かきゆくと。あそび。めやれ  
薙る教り教説のあそび。むけねぬかを至ける  
女とあひをすと。あみつらひきうけると。がよ。いゆうで  
く。あらのふよきと。あむ。いよ。づらひはと。ひよきと  
ときと。かの女よりをうて。よめでよる  
かぢくよがひ思ひとひがくみをと。るわいふアビだすまね  
わら女の。たまら。の教説と。とくらさざあだ。わらま  
すと。足ひと。よみてほうち。まも

大ぬきのむくて。あまみたかまぬきが思へと。そとそたのよざり。され  
かへー

ちふぬきと名ふことをたて。きあられてもひよと。せのあつて。ふわと  
歌へくじ

淡广のあまの橋やくら。よ風といひみ思ひぬくと。なみにふく  
ありづら。す本わまこよ。あま。ぬきをたぬふかう。けり。はと  
たぬふかう。れぞうて。ちや。おれた。と。かと。ねく。る。こ。る。す  
いで。く。こ。み。だ。よ。と。き。茶。の。う。け。く。わ。い。ろ。ま。と。み。を  
いつを。ア。の。あ。き。せ。ア。ア。と。び。う。だ。う。人。の。あ。み。の。と。う。け。く。は  
筋と。か。り。す。り。の。う。く。と。さ。く。に。た。が。ま。と。と。う。こ。れ。た。の。ま。を  
秋うせよやまのまのを。わうつろ。が。人の。ち。ら。と。く。と。ぞ。か。り。よ  
實平。は。時。さ。ま。の。え。れ。お。食。の。う。

様の。ゑ。き。け。ば。歌。な。え。と。わ。う。と。く。や。人の。な。ま。と。か。り。よ

素性  
の。ま。

おゆばのせのへ、ごめあがれをひまされぬり。うれぬべらな里  
あつてこそ思をむ中ひをみれあはとぞ。た後のおきがみふ  
つらまれをもと思ふふのほくくにみり。受けよましをうねりき  
忘きあきさきとうもみふやく。かく人のねはあをむとせす  
たえびやくあをれ川のよどみふべんあらとやもとめりをむ  
あめああら人のいもくあくとみがあづまへがまく

よどあめよともへんこもくめとながれ。ふうせんあるわと  
そこひあき園やひま山のあまれせよこをあと源ひたて  
絆の角むぐらめいろふくくゆひー。おもつ對つ是若や  
みちのれあひのすもあすたきあふ。ふれを思ふゑあせよ  
思ふうひよせよとくれせよなびくはぢのいろあとよなは  
くのいろよつろふらめとまく歌くすへ。あまのふ葉あくねが  
あくねまむ里のあくよあくようみをのさんひづむ  
くを重ねの歌うあきるあたれがめよこそみえねえとばをふ計す

小町  
あらけ  
まむ

ううとあきらとくよをありううつるをむくちむやえなくに  
あんぐりに人ひともとやあうじを取立か下緋のとくにくもくさ  
かくろふのうれわくぬりまうあふるひとみき。袖ぞぬきぬる  
ほをにこぐたあーふねとぞく。まち歌ト人よ恋にくすふん  
よく歌ふとあれす。麻とくさくにむく。袖やあよとくうれきん  
いす。よあふいもかくるふう歌こもきあくよねこを是せて  
人と。あひよあひよあひよ。あひよく。あひよせ。が。そ  
ののあうと。まうとあまきけるとア。ふ。鶴の鳴をゆ  
く。よみくがくよみは

思ひひで。夜りき時ひもくのなまくひらとくへ。うれや  
おのからひやすうちすみ。おだあ室にひきば。かの。むろ  
ー。たこせた里なるえどもと。どもあつめて。西をとて。  
たおだに。まくのをそりよして。むかはふるきば。あまくとくうは

よ  
く  
い  
せ  
ま  
ま

うへ  
影へば

とひそかすあひのむろひをもあがめくからくやまむ  
毛びこのなりすよしもぐらあもんをとすきりきりとがめまゆ  
までといそがれをゆうかんあひてり約めわとまくがねは  
中納言源の昇の松のわあみのまけよ竹をもる  
時よよみくやをもる

あはめやほけをもあはぐとゑづらすとおくりともとお  
影へば

あさとあらぬねくらひがるよ人のまろせあきてうれしむ  
山のまきらよまくるまはらへんとせどもあこだてもね  
大ぞくらゑよき人のがくらうりの思ふごとにうらめりうら  
あやうのがみをゑいはをもお見てとんのなじさやねくふ  
れやのまちあけふ人のむまきよどあびよあひる

いせ  
寝  
まうね  
ほくに

あはりひるあひだよひやのよどひくまだいそき  
くもとくまととさんねぎあまく入るるそめくち  
考とうすとよれる

あゆをのなみとそとととあはれ後後ようかぶとくはあせり  
跡へば

かなみそとあさりあれよくがとするととまくわくわと  
ゑ歌五

ふ條のきはいのま。西のたのよ強らる人よほいよ  
あうで。ものひつらをなるとも自の十日あよまに  
なむわくへがくきよぐる。わをほりすきどえもの  
せいと。又のとくの春。桜の花さうすに。自のれりらう  
くる桜をひとひて。かの西のいはいまと。自のうき  
また。あはくたる桜をまふきよて。よ来る

自やあはれ考やむじのちるが。なまくわくのまの考やく

まをく

歌

あきらめあることをよ思ひりやよひ人よもとひよすを  
よそものうたうま一物とがどくはりると物よみれを失けぞ  
いふおとくあとちりむ人よぐれさてもやうなとせとくちるも  
久きの天つるよとよちよ鶴くか人よもとひよそりふ處るも  
足そとすまへと今まわが身とばらむと人じくふ處らきり  
雲を承くをきたるあさひるあ生やひととてのこよびへん  
志がみゆふ人のゆゑもあきだますれぬしも教なしはま  
うれめのまかひく流もうちなきかよのみこをあまへよもぐ  
あひよあひくねりふたるのうが袖よやども自きへねるくほかる  
秋からでかくもはなれに秋葉するつぐる枕の志はくなまほ  
おまの延ちの志やき衣とき残わくみすゞやまあれや君がすまきね  
山へゆれ渡のつるがとくまよよまね人たのもよまどそくわくと  
あひよれがをとすまされみふせのあすくちて思ひを失れむ

院の晴のまねがきわひをがきを忍びおねよひあぞくじあかく  
玉うづくいたりたゆとやすく風のひとよと人せきつとせきく者  
きが神はまたまき時あふすねと君がちりよ林やきぬくん  
山のわざれんとちのまねよりぞひりうのみ人のまゆくま  
志奈たねとくすとくまうれどりくがまきものとありたべ  
あすきどもあよのあそひとすればきと夏夜よきやちひ志るも  
麦よひあふことかくあすかくはやいとねねむかとやつたら  
わらうとひと麦よみくびとくまき思むねゆでとくけくつる  
えとまのみあがめふるやはするまびとおのぶのあぞかひら  
玉がんじとひてきく井水あたより思ひくじの私とのみぞ歌く  
こゑやとい思ふおりうむじのゆそ科いたちすくまはう  
すすまたとみびすれどまくにのむよりもそかとたのすくは  
くはうとがりすすみくすれくまくあとのあざとやすく

仲年抄  
卷頭序  
みつ私  
よし  
いせ  
よし  
よし  
よし  
よし  
よし  
よし

けんか  
さか  
のむる  
よし

月よよくこねくまのむかとをひらひやふんよびつむねん  
うゑでいよ。林田からまでひなえこねばり。初丁の林すぞ写ねる  
あねんよすりえぐれの林すぞひよふけばりよびくらもく音  
もさくともあまにむろうおほのえのすりへるをゆそぞみす  
ほのえのすりわどくよあまねきだりたけのねよ写ねりあ  
仲むのねほ。あひー里て佑ひるとかきぐくよなうよ  
ま料をちかやまとのうみよ佑ひるとくまうると  
よみくはうも一け箇

三きの山いよ宿も草木とたづねとあひとちりば  
歌くべ  
嘯すよ壁風をもみ林をだめうつよとゆくら人のあひの  
うべとそがお時あまふとねまがおととくようつらひより  
うべ

人と思ふふ本のをあへと風のまじくちとみだしめ

本すむよの歌ほきのあもほゆぐ。むなで後よ住くらる。  
うしむるとあまや、ちをのあひど、むらもときてゆ  
さりにかすみーくせばよみてつうひーらる

あよきのよとよと人のなすかくうをまごよめよんゆるわく

五ー

かまくらすよのみーくすうとつうがるよのかせをやうあひ  
歌くべ

かくねなきがまよことまうとれぬかけてのあやこひと思く  
林うぜいとくとーとあらめぐよ人のこころ代えよたうもむ  
ほきむく幸あく人のあとのをだ林よたれのみまくは  
あちとこおーとくらう。あひがまを佑ひる人のとを  
でんちかこくとてほくとくとくらはばよみてほうりらる  
志でのゆふりとさうとだかすあほをとくよりまづこうとて  
あひをきまける人のやうやくかきげくよなまけるあひ

あまく  
かけのりの  
さねきみ  
とめり  
字平  
毛素

立井  
み井  
十日  
さざれ  
さざれ  
かねの  
ちねきみ

だよ。やけたるちのちにえども。ほりをきく。

時もくかきゆく小室のあそぢはてかひだなえびえらは  
わ思ひるから。ものまうさけるさよ。壁内のみえ  
まるととんくよめる。

こまち  
おね

きが竹の葉べとつが夕と思ひをりえてまちとまこす。物を

歌へじ

水のあらの消えうたおとひあがらぬがまでねむたのよる。あ  
あきらあまうげああくどうをほひよあめとたえぬと思ひあ  
よ。賀川よや今こそほくらめやくひてくやとすまを片ト  
せの中の人のあらひをねび免のうちじやまたむどよだみりは  
たちこぞうそかくきをえんざうづらふことをとくま  
きうえとうはらふりのせの牛け人のおらはますをあまける  
あのみやせとうぐひひとあきりさん人の人のあとちまふを  
かあすとかきくさんひとくともあらずちうねるをめとくそくめ

よじ  
よし  
よしお  
よしあ  
よしあ  
よしあ  
よしあ

そせい

そりとてあがきみびとが高のむとがむとよみてやあのもむ  
くよ。おまうれやまるとけせむおせんのいよおひちうふん  
寛平は時。古屏風よ。あかせねじりる時。よみくかきく  
高奈何とうたひと思ひへはまきあきこんのかくはなります

歌へじ

林の田のいねてかくとしかけかくみなよとじとく人のからく  
ちうるのむとをひきよのやせんのこころのあきくうを秋を  
あまれどりともわと思ふときなどう波のとあかるトむ  
身とじと思ふときぬあきびからてかねる。身は枯みられ  
延びのる。屏風よ。もぢのとせうじとねとをうめをとだら  
あひうねたうおとおのうをお思ひあはせとくもむりぬ  
つきかきとじと思ひてかくとあらよまくとくはるあくまう

歌へじ

は  
かき  
よこ人  
典傳集  
直子著  
いあを  
たがの

今きびたん取すりをうびつもあき名ぞとだよすまー物と  
いきとどく思ふてつらかとまことかひと人のきくく  
あかのむじうたえねる時すとんかゑしむとあむすりと  
ヨビたつは時さとものんかきいづこどのがあるとたるむ  
うしもとあきてもよもくを取とかよみある前あとで  
冬を前を全きとことうちたゞびあげんもゐとなれ。つがまわ  
りくわのまがおやかとあみ立くとあまの往とあうとみほう前  
あうととあうすにうへん爲してせんのんどうとこそやまめ  
ゆまをうみのほのまきじとためやへきする。やうの数よそみけ  
あーどうまきなとまつて引居のいやとやさうるきが夕くわく  
あぐれはもみづるようとあとのものんの林よあよびーき  
林りぜのまひとふせぬるむさー壁へあぐて草たの毛り毛り  
林風よあかたのみこそうれりきよがおもかく悲ぬと思つた  
あれかせの吹うちらがくくのものをうつみともれりうれきを

十町  
さざん

林といひとよとみどりやわごとくのゑとくきる名よ林をうれ

とすくまきとうちもくやなをと人よかとくぬ事ぞとよくも

又もとあくまくとふくよとく。

あふこととあがくの様のあがくとゑつゝくよにゆきとよけ  
うきぬらけぬはとおゆる林をもあうれてといたのやれぬも  
あうきとひあきのゆのあうよおつよ。壁のゆめよ。やせのゆ

哀傷歌

うりうとの身おうまくよとれよみかる。

ちく波面とあんにうひぬやすうおがかくとくよ  
されのむかきだわいようちゑと。あくはのあうりふ  
かくよけら歌。あるる

ちの波おちてとたまむあくはいふがせまでの名よとれられ  
ほえうかわいわきだわいようちゑと。あくはのあうりふ  
ふうきの山よ。とすみてる。後よよみる。

を怪ひかへとみつてなぐさめつはくさみ山にたゞ

涼風の跡での様へんあらがまくばらまひ茎深よナケ

風涼秋野外の身まうまたる時よ。よみくのかの  
ありはらち。まは

ねそともあねでも、こでり、ちやうこがうつ桜の枝を夏見たる

あひまきまけの人の、おやうアヒタクミハ、よゑむ

夏とこそづくまきせの中にうつわるめとおりひらうか

あひまきまくら人の、おまうけの時よ。よゑむ

ねうがうちよきとのみやい夏といもむたうかき聲をす見よ。だ

浦をせけの例とあてて、もとみくらみとともももとくみどみ

涼風のたまふさがむつーあひまきて候る人の、おま

くまにうる時よ。とくひよつうむじとく。よゑむ

されだぬくのやちだび野ざいならまおのくとくねう

用花

紀友幼が身まうもみくら時よ。まち

あもあもねつううと思ひどくまねまのりよひ人こそかがくうりま

時よあれ林やへくのこもくわるどくみむに立むとものと

ちくがちりひよてよある

神宮自志く井よぬくりみぢまいたまび人のたむあうう

ちくがれりひよてよある

みぢみぢうきいよび人のたまみのととととおうきる

ちくひよ待る身の林やもまうけむとくとく

約處があくでの山田うきと見ようき葉中と見ひねるうか

あみ深の君うなりとぞ喜かきやたまび波のあとみ麻

女のやうすひよく。山ちよ候ると。もる人のとがう

ひ候うまきとけむと。返りよよある

あし門の山よくひまみと見のまうすの袖のむす時よ。那

よゑむ

深園のそへ。池のやまとものをとよとよ。よかな

水のやりふをほくものをさやうむるがみうげのむりやゆるあ  
源の葉のみうとのほふゑの日よかな

まゆきをゑのたゞかけりしての日のく絆へりよやわくね  
ふうすみうどのかくよのゆくよどるひるを  
ほくよまほまくと。深園はあまよなまばさくよせす  
まよらかくと。ひえの山よのやまくがらわくよくと  
えやくよくと。まかくわくぬきて。あらいかくよ  
たよくよくと。よろこびくと。よかく

えね人のあらわにまをねめうおけの秋よかよきなよせよ  
はるのあやいあうちきこのみまうきての秋。かのがた  
不とよまとまくよなふ。紅葉のまよふくよくもあら  
ざまくよくと。かのがよよみくいきたまく

うちほなよさびくもあらうあまちをよめおきやよのをあら

ああのたらつ私の教誨か。さあううそてのスのそへれえ  
ほとくきほのゆくとよくとよかく

教ごときやく、さあくがくつけをそよがまへ財よそひく  
さくくがくとてみどりのふ、やうやく花さくれねべき財ふ  
かのうふりとく身すまにきだ。のもとよてよかう  
あうト身まくまへりう人のやぶの。樹のもとよてよかう  
わらわらもむくわきふをとどうをせん人の教で立つき  
ほふのたのむとくちゑの身すまて後。かの家  
さくとほくれまくるとよかう。よかう

ゑままで物なえす。まくがまのうらさ。むくも見えづる船  
着余のそへりの教誨の。おと中おとすみ荷くら  
ぎしの。おやうまで後。おとまほにあまよけるよ。お

の旅かた。がのようやうでまくらはいでよ。えいき  
乃舟をもとあまーせんざい。ひとをくあれるもる  
とうふ。ちゑくそうすけりとば。もうじとかひや  
まく。よしむら

きみううそくともよきゆの旅のあけきやども生よる  
あれたりのとこのちのほん時より是まほる船とよ  
とこひながなきてちくらるかくよ。よみくがすりる  
かとあべきれをまよひえあむ舟を渡のたきやすらり重  
歌へ

あき人のやどにかなむかきかけて旅のとあくとほりたも  
准えんよとむきけらんちの雲のたは壁ともやく旅う物と  
お旅なれえ。園籬のえのとよまくさりけるとくを  
くわらで。女とのおおうちよりる時よりみのとみ  
すら。情のかこひのひりかよをゆひはたりうど

まて舟のむじのむかく、おの、おとかん、かき、はなだらる  
かさり。お家とますねりのあぐ山の旅をあま行とより  
ととくの人のまよまよけるまに。女。よもうよやまひと  
して。とよこく舟よる時よりみが生て。男よもよだらる  
こゑとよまきりをつらうなまよもあま。舟よれんゑぞうおき  
やまひよもうひいはる林あちれたなりけくと  
えまきとよみて。人のりくおはらう

みちをと風よやらせてもうようもとうおきわやいのちくま  
おまうきなもととよみる

森とあどあらめと思ひくむづがたよあがねもくまと  
やまむら。よもく、あまよるる時よりあは

旅のよひとくらみてやうかどかのよとひ思ひをさすと  
かひのくもあひもとけり人。よもよもととよも  
よもよもあつま。まくらよやまひとく。いま

なきよけを。よみて。およりくやうて。母よみせ  
よとひく。くはくわくらう。

おとせの行ちひちとぞ思ひにへりたまのかをなきけ

雜歌上

歌

あうへよ處をかくするあまのいとまく船のうひしゆく  
思ふともすとおきる秋のう綠たまくさりのまをひく  
うけもとなまつやまがお続めへよたれひそすと  
かきまかきゑがおととくもい時わづぬりのまをひく  
あくへいとばすにまたかわいすうちゑのあま  
むきまのむとゆきよむく。壁の幕をよがくわきれと  
えあかとうととくとて待る人よ。うめきぬとあく  
とてよみてやすする

まゆあひに時めをなるか壁あるまほぞつりきざるは

あま

大納言ふぢりのくよ法事の物語。宰およう。中納言  
ふたりらとよし翁。翁ぬう。せきぬのあやとあく  
とてよみる

あらがりとやまむむうとよふきんよそせうのと  
いそめうみめをじかく。やぢく。せでいそめみと  
はふありま仕事とよりよがくふ里なすにまきひをむ  
よろこびいひつうをとて、とみてつらう。よる  
月のむらやがけうねいのくみふまく里ふむとよだり  
二條店のす。車まのいやまもゆと一けひとによ。大  
ちく音よまうでぬひよる日よみる

あま

かわらややくの山あらそい神事のこととれひよだり  
ふすのすい娘と見てよみる

天はれえのがひぢよきとぢよと祭のめあじとめも  
ふきのあたよがきのものちたちたどりると見てよ

あま

たがなうもと。せがひてよゑる

ねやたまことあまいを取くやう。案てやあを翁と思えん

寛平は時よりのまほひはけむとのこと。がめを

もせ。たまのまのほくす。ちほまのちろーと。

きこえよ。たてまたまた。と花ぐどとまほひ。

かたと。おまくよめていで。とさくもいだれあうす

ます。おひひのくまほそ。さあんあまほるといひ

るを。花人の中にかく里をさる

玉だまのばがめやいづもよるまの後の浪打かきよ出ふ

女どもの。えくひすもばよゑる

かもこそみかがれのまち本がまひむよまきをなりもむ

かこたぐよ。人のあよまうせまくる時よ。あよのまを

させくうらと。あーたよくはとて。よみる

様めのよるの衣ひう毛りせじうつ里ぐすくも匂ひぬるうふ

かく出る肉すまうがわりの山のあわくよく。む魚くえ

あいながさあらきはさしげやとをきて山すら肉といて

れやくら肉とてめで。おもぞ。おほれを。人のを。あらの

肉を。うとて。元は肉。行。恵が。もううでまた。里る

不。よゑる

かつ見せどうと。わらう。肉。かがめ。いたぬ。里。よく。と思へ

池よ。肉の見えけると。よゑる

ふかえ。まわと思ひ。と。かそこよ。山のを。あうで。いつ。肉。見

て。の。い。ま。の。う。と。と。ま。や。な。ま。だ。さ。う。き。と。ま。め。ば。肉。ぐ。あ。が。ら。く

あ。う。ま。く。と。肉。め。く。く。ま。ゆ。か。と。い。ゆ。か。と。ち。ち。て。ぞ。あ。き。う。里。る。

あ。き。た。う。の。と。あ。か。ま。く。け。る。と。と。す。よ。う。ま。く。や。ど。り。う

よく  
よく

た。かくよふんくらうとアホ。こ、ゑひくらちくいす  
をもどり、おれをよみ彷徨る

あら歌くすまざきと有の、かくも山のをばで、いせびと阿木  
田もとのみうどん時分。井戸は仕事。あさけいこ  
のことだ。あやまちあさといひそ。井戸とかくせ  
むと志川と。ちの、とやこよみまをよめる

大ぞうとてアホ。井戸はきくをせども、えうきけ取くす  
井戸

あま  
教信

いそみくふらうとのりとが、をきのひすれなぐり  
いそみの程中扶をづねり。生どりのんきるもとぞくむ  
方への志はのと、やきいやきとよにとさうすわあアマめや  
トこそあれ、あもむり、ひととこ山さくわく時とあそび。あを  
よのせじみぬるわたくしの、あぐの橋と、うとすりくう  
けのちよ里法むすの、うまとが、こども、ちいさううと

大あーかののやうと、あいぬきじあおむすかあげかくと

又ひさくもあさのちよの、下まかいぬきじ  
かくすまざきと、よしのととひくたつひくをぞあは

かして、るやあよそのうよやく塙のがくもおへがいよするうあ

又ひもやどるの、しげのたまび。

ちいらくみあもとおもせば、門きてあらと、とてあたまはと

あひこのおへむくーありくる。みくまのかまか

よ見るとあは。

さうはまに、ゆかくあもととおへるよ、ひやともに、  
とすと、もる。物あわねば、とく、肉とあく、糞かうと、とてつる。  
せざめあへう、とくとく、もれうあうと、つきあくるよ、ひう  
續山、さたちよくて、て、あるむく、ぬる、おへをやーねるが  
げ、おへ。ある人の、いそく、たとのく、るね、が、かまと  
なまもとの、おほれ、の、みこも、をよみ彷徨る時

よ。ありひじ。あづら。まことて。時じ。えすり。もとぶ。  
たずは。されば。おもじ。うに。むの。みこの。ひとよか。  
ども。あと。て。ふと。と。もう。じき。あけて  
く。けだ。あと。を。おく。わす。する。うと  
かい。ぬき。せ。ねお。の。あ。い。い。ゆく。こ。まく。わ。さ。る。うと  
か。屬。

せの。中。に。さ。ぬ。ま。れ。あ。く。も。が。前。ふ。代。と。の。る。人。せ。ま。の。あ  
寛。平。は。財。き。さ。い。の。ま。の。す。捨。の。あ  
あ。ま。め。や。ふ。ま。け。る。か。る。山。く。り。む。ち。つ。く。り。も。り。お  
ち。す。で。ゆ。時。う。の。さ。ふ。し。ひ。す。て。を。の。こ。と。よ。が。不  
い。き。旅。ひ。て。あ。ら。ふ。あ。び。あ。ま。る。ほ。い。や。よ。づ。く。う。す。つ。き。  
ち。い。ぬ。と。て。あ。ど。り。ヨ。グ。カ。と。せ。わ。き。り。も。を。ば。ば。よ。あ。す。す。お。う  
歌。く。じ。

ち。ま。や。ふ。る。う。ち。ま。ち。ま。が。料。そ。を。衣。と。か。あ。み。身。の。ぬ。生。が

よ。い。ふ  
よ。い。ふ

か。う。て。ち。え。く。め。り。ね。往。よ。の。脣。の。む。め。ね。く。よ。の。ぬ。り。舞  
絶。す。の。舞。の。心。め。ね。く。な。じ。く。よ。う。脣。と。と。と。ま。す。り。の。を  
あ。げ。き。う。い。そ。の。小。ね。た。が。よ。よ。く。よ。ろ。ほ。よ。か。け。て。た。脣。と。ま。む。は。む  
お。の。も。へ。あ。る。人。の。い。ち。く。持。中。人。ま。ろ。が。歌。す。  
か。う。歌。き。と。や。歌。き。ま。る。か。の。そ。の。よ。た。て。る。歌。た。ま。う。歌。く。り  
説。と。く。で。あ。る。今。よ。む。た。う。さ。ご。の。ね。を。む。く。は。友。な。う。あ。く。り  
口。う。み。の。な。き。う。や。あ。ひ。よ。う。く。ほ。の。消。ぬ。の。く。よ。う。く。も。は。  
口。と。脣。の。か。ぎ。よ。ま。せ。る。あ。る。の。脣。も。て。や。る。あ。を。ぢ。鳥。山  
口。の。脣。よ。せ。る。脣。の。脣。と。み。ま。く。の。り。き。玉。は。一。よう。を  
施。波。く。と。お。や。も。く。じ。あ。お。お。た。ま。の。鳥。よ。た。う。き。後。る  
は。ト。カ。き。う。い。づ。み。の。ふ。よ。宿。る。時。や。ま。と。よ。う。お。え。ま  
う。で。ま。て。よ。み。と。ほ。う。ち。う。する  
君。と。ち。り。お。き。う。の。ま。に。る。う。づ。の。た。が。ね。く。れ。を。を。お。と。ど。う。す  
か。く。一

かきつ浪たゞの浪のをよれのあよこをゑとよちりよりのま

法かき

なよもよもよもよもる時よれる

あよもよもよもよもる玉葉とかまを先の延とてあい革ねぐらる

法流

あひをきすける人の往すよもうでらるふよみてあくらる

法流

往よどあまいはぐともあがねせぬ今とすきまちすといふねま

なよもよもよもよもる時たゞのあよもよもあひてよれる

法流

あよよりたゞのあよもよもかけを名すかく井ぬ物すをあくらる

法流

法皇。ふーほよあくらますたまくら日。轡。御。よくとす

法流

とつとと影よてよよませぬひくら

あくたづのたゞのふもとよく風よよせてぬくぬ浪うとぞうる

法流

中物のとせぬの世よ船とほくとてぢろくともくめやあを

法流

びく日。法皇。あらんトよもちはたまくらタまくら法皇。か

法流

まちくよもむくとけるとまよよみもたとまつまくら

法流

あがくよもうから船の君あくびかととよりといたす。あと いせ

かうあくらふはりよあら

法流

みやこまくわきがするがまくの浪のとまげて風をひきくる ませい

法流

布引のなきよとよれる

法流

あきちくじ続めあくまむひきそせのうきの時の浪よぞかる 行車

法流

布引のなきよとよれる、あくままで、行車みくら時よよれる あく

法流

ねきよぞる人こそひくしまくのまくらもあくら袖のせをまく

法流

す壁の浪を見てよれる

法流

たゞなめよをすてきよざる布をせよとて、舟とよまくさき

法流

きよ続の舟とめをすくらりたて山さけ舟がまてきす。残 作

法流

続つよまうと、続ありとす、よれる

法流

たちぬちぬをす。人をよきものと行車ま船の布さくらむ 作せ

法流

舟着虎のこど。ぬのひきの船あらんせんとて、文有れ

法流

あねの日。あくらほくすあくらとたよまくすくぬへく

不うこよませぬひをもよ。よれは

村あくとさむきの布をながるよらんとやりふまかさほ  
むえの山ある。ひとみの風とそよよれる

落なき川流のまくみをほむをなげしおくるきまちほ

れかくと風もよらはなまめ  
まくら

風ふけどとまもさくぬあらまひせをへくわらむをなごす

田むらの内時ふ女むらのさぶらひすく、古屏風のゑ内

らむトゞら年、風おもてうけむとくわらかす。也これ

を歌え。おもとさくぬふ。おやせれきば。よある

足ひせくひのうちれ続なきや前とよたれとたとのたとえぬ

屏風のゑあつをよなる

寝を起一時よう後ひうちもてせひまなれやまのほもある

屏風のゑよ。よみあらせく。かきこする

かやくはも山の稻のまきなきをあきらめにれむのうれを

あれ  
あれ  
あれ  
あれ

雜歌下

歌一

世の中のねうつむをもあまうゆまみのまちだけひの歌よあ  
いくせもあじつがりとあどもかく姫のうちかむひまくと  
鷹のうちの穂の野の穂を糸をのぞ思ひ詠きせぬよのゆれうさ  
あうまとむれあくみをうあれをよあがれぬあくせ中

たら  
たら

かひのうみうけむる時、京へまくやまねがまする人よ。

佐りちへけり

みやこへいよとまも山をみむきぬを言かよふとあくへよ

文庫のやすひでび。みうものぞうよあくとあくよ

を。えひでたドやといひゆきむる五年よよあくる

よがね達をえざうきよまのねをなえてさくああがくとぞ景 小町

歌一

あをれよとまも山をうみむ中を思ひをあせねばづあま

はく人  
はく人

ゑてふきのととみくまめのむうとふきあいとおまわり  
せのやれうとさつときをはながくよすりあらねいあくとありと  
よれあらひまくうつうれんともゆ先とよくびあまをなまきを  
世のやれいづくさうタマのあまをゆくとやまむあめうとやいだ  
ゆざといわのさうじきとこをあれせのうきよりいまよりうを  
あらきのたえびとおびとおびとおびとおびとおびとおびと  
あまよもよしてちよよのせんあみさうだは風をあくめら  
いほくようせとどもむかこを壁すもゆすとやまとふづうなれ  
よのせんもじとようやうかまくをよおせんとおのあまくら  
せの中とよよあいのまほんとやあれうのをのまにゆよすも  
みよしよの山のあめうよあすがよのうき時のくれぐれふとお森  
よよよきばうとこをよおせんみよしよの岩のかけをあらじてん  
いうちあるむなほのせによまをうせのうきことみゆえこよも  
あくひのまにゆくはるむよのせのせあるうひを歌へ

これあ  
みこ  
ふるの  
まち  
そせら  
いほく

世のやのうけくよあまねがく山のあのもにふれゆきやりゆば

お歌トモノ歌をう

よのうきをうるな山のいがむるいがよくとほくとほくとほく

山のほくーのからくはくとく

せとねて山よるく出でたなやうと時をいづちおくる舞

わからひくるとくとくとくあらふとくとく

くさくよのむかひくも井のみのうきとくあがせやまを

歌へ

よよよきがとくもまがき是井のみのうきとくとくとくひすぞ歌

本よもあくびとくもあくびのよのうとくとくとくとくとく

あらぐのいあくたうとこのうとく

ひづくよううきせのせと歌と歌とく人のあくくうおーくまく舞

かきのよなうな舞と行なう時をよある

おひひやかのよ舞ながとろてあまのあひとせんと

たまく

まく

まく

田もの内財よ。まことにあらうて。はのふの。まよとひふ

ぬよあわきむけくよ。まのうちよ。めくらへよつりく。

こくもよみくあくがなまく。幽よみ。ほなきつゝ。とくよ。

左をね壁とけく。めく。財よ。女の。とくよ。ひよか。せ

なそくち。ゑゆに。よみく。ぼうち。よ。

あすび。あく。壁き。とくよ。思ふ。それく。くと。タと。たる。掌

ぼうさとけく。めく。財よ。老。

うき。まよか。どく。せきと。まく。めく。が。だ。ま

ふ。まを。ぬ。命。まつ。ま。を。と。だ。く。う。と。あ。ぐ。思。だ。ま。が。か

み。この。あ。の。た。ち。と。ま。く。ふ。め。く。と。ま。づ。く。

び。と。と。ぞ。う。け。と。め。く。財。よ。ま。え。く。

ぼく。ま。ね。の。ま。の。と。と。ふ。ま。で。よ。ま。の。こ。山。の。か。げ。と。ゑ。つ。

時。か。ま。り。く。と。あ。ま。く。ふ。財。あ。く。た。う。と。あ。ぐ。く。と。ま。う。

ら。の。な。げ。ま。か。か。く。よ。ろ。い。じ。と。思。ひ。く。よ。老。

さと  
きよきの

さと  
く

あく

あく

あく

あく

あく

むう。と。ね。き。と。善。よ。ひ。ま。と。よ。と。あ。き。が。便。と。と。く。ち。の。物。思。ひ。と。あ。

か。つ。よ。経。き。財。よ。七。條。中。富。と。わ。せ。く。と。ま。き。う。お

ほ。ゆ。に。と。と。す。ほ。ま。く。

あく

口すきてひよめりとぞ見ゆがひまやかみうけとまきとれ  
源家のはとよおとみはく、京へまうせぐとてびとてある  
る。人手よ。よもてかくとある。

まどとまみく里を出てひあがいとて源家見よあらん

う處へ

せとあがいばとほく風へもがまよだにやどゑひとくさん

歌いしべ

あとゑあよたのうへわまうが、うまくわせむわまと筋はき  
はあひ。あらへむく。そととあくまくわせむの。とく。  
とをすなまにまき。あよひめうつめちよまがて。あよ  
あよえ。よまそとひよほうせまくとみんいへる。

かへ

絶波うとうむきまがちあやねじづと、のわやとくがまう  
なまくにさむくまくと、あやねじづと、むくじと門させまくと

あたものへへうかうであまくまくとよみてきへる

立候板

水のあがいあふまくまくのうた家のうきとあれやねとくえとくぬ  
ひととくを。あまくとあくまくと、あひうみまがよある  
うとあくまくや志よほんかあすりあらあるめいふあまけで  
むねとくのかくうが。おととくまうできくまくらる時  
よきのふまけとく。あめがよひにこのまのごとく  
なんほりれるといひをうとく。よがく。

かへ

きみとのみ思ひうがのあくまくいつかとまのまくとまくある

ホーあまくまく人よつうまくらる

れわひやううめあくまくねどきよとまくよとまくよとまく

歌いしべ

いざとよよがせひたむまがりやふくみまくのあれまくとく

ほく

大井

ヨリラ處に心滿の事と急に心とあひきよせねたるつ  
あいやにあこのたうみもうどまもせとうぢ山とんひふある  
あれよりあまれいじよの鳥をもせ姓なん人のかくさきとさぬ  
あくあうきる時よあれくわがよ女の琴をさる  
ときくときくよみくよきたをゆる

ヨリラの後、かかれて今かくよなむきくらるたのねどもる  
ちうまにやまうがるきよおれまやどれまくる時よある  
人ふる處かとひとあがどおなめかくわうれんくらる  
歌一  
お

せのかいびきうきてこがならむりとすをやどりとどむる  
逸坂のあじの風をよむむきてあくよみねばくびつどぬる  
かぜのうよわうらはくまちうおきくわくとおじあうねづく  
かとうよそよみる

あまうわくちよもあねまくよせよひまくねまくみくらる

まく  
むね  
よせ

ほくよけくの時よおうまかよひつ。其處うちらる人  
のよふ。京よかくよまうでキソツラシく  
おなじくよどもあいだをあくのくもくはをゑりくま  
本をだちとねぐらして。ひきて後よづらしくる  
あうざまく袖のゆゑ入るさんあたすひのあたまちまる  
寅年酉時よ。おもあーれをくぐりよやされて居多  
時よ。未寅のたゞひよく。ものこと。湯たうべ  
くろついぞよみけく

およかのよあざくよそくまのをかくねと思ふくら  
歌一  
お

風ふけがおまくまく流たつてよをあやめがむくりあやん  
あるぐ。ああむく。大ねもあまくら人のもまな。  
あくよみくわく。ばんがやおれくたうて。おも  
口わくおやくわひだ。男。がちのよよくとあひあで

まく  
みく  
のう  
みちく  
たぶ

かすひつ。かきやうふのみなまゆまくら。まくらをとど。  
 つづけあるりきとこをぞ。は肉いもととに。男のふ  
 れどくにあつ。いだやうなま。あやとひくみ  
 あきまた。あとひやあくとく。かひく。たぬき  
 うさぎ。がむちくまね。せんざのあうよ。がくまく  
 えきがとよくるゆを珍とがきあくつ。うちふげ  
 きく。はあとよく。ねはなま。これとすまゆ。それより  
 えやくともおりうじあまにそく。とくにひつぐく。  
 たがうをきゆ。ほんじゆか。おたつみゆとまくとあく  
 まきく。秋ん時。おとどをまちどまく。ともあぬゆととく。  
 貞親西時。お葉集はいつおうすはくわらび。ども  
 せかひなきば。おみくたてまつまく。  
 神、おもむれあまがく。おもむくよ。おだふらとぞれ  
 寛平時。おまれもけうつ。おなとよのう。

よんや  
もくま

あたのむきれしゆ。まの書のう。やすでゆうえはうかん  
 金事。ひゆふをも。あたちひど。まぢめよ。むくえあむ  
 おやうる時よ。たてまつまく。よみて。かくよくまきは  
 く。たてまつまく。

山川のむよのとむく。あまきとこを。あぐみちよ。もぐる  
 雜作 総序  
 教くらべ

あまの。まれあらうよ。をひひそり。ヨウオハはみに  
 あまきれ。をもとれおく。ふじの緋の。りをほととふ  
 あくどき。あくとく。あくらう。人とうみむ  
 より内。なきとふりめて。れわひて。思ひへいまは  
 いはうに。あまねづく。ゆくおれ。たゆう時。ふく  
 かくまく。ゆひきれく。あまき。けふばくねぐく  
 がくとく。えぶのまされば。なやまび。れひひく。

はく  
はく

あしりの山へとあめあぢやねく  
きれよもあひきんをよせば  
をみをなすゆかよあまびゆとりにて  
あはきゆせんじくをよよそよど  
あらため衣の袖ア かく蟲の  
思へがきあふをだられぬ ちら高  
あそれとおりへを まともんふ

あう歌をす法ア 時ひきくろのうおながうと

ちをやぶる神のよす くま升めせくもたなば  
ひまをのひくをの山の 喜 猫 虫ひみをせく  
まみをのそくとくよ さよえてよまやくまげ  
たまごにたまむねねがて がくみきききのたの山の  
りみぢをと見てのこ志のふ 神み自 あぐもく  
きのよれ 座をとぞれふ あう雪せねまをとく

うかとふとむははりつ、あまれてふ あととよもつ  
君とのみちよすといふ せの人の思ひをもがの  
姉の歌のをゆる思ひもあらずて まくまくをと  
ふちももかきくらんを やちくさあ あみをごとに  
まくまきあねやせうとす すまきは 中よほくはと  
いせあうこの脚のあやうひ おもひあつて おねとをまと  
なまわをあ えがきこうろ おもひあつて おねとをまと  
そそとア 太えよのミ えうとお おやあらなま  
ほくを かまきせぬ そくやめ おふまがく  
巻もあり あまきのをもやめうむ  
ふき作め よせること ふりきを いらやめぬま共  
ひまくそ おひふんを のをす あまれもう  
あまきふ 人まうらまへ うがはき オハ志じあづ

法  
もき

あらわとあやうきまで おとこ、おと  
ひどく歌へ おもかげせめ いじゆる  
ちまの身は ぱりれつてと おもさん  
いす／＼も くすうけりせむ けとも  
あち／＼を ちのあまけむ かかねて  
あそびに がをあれども するむり  
おあまと なきうれしの くるま  
えかとより とくひらめせ くわきめ  
かわえび あのかまねの キアド  
きりほりき くわせ山／＼ ちうさき  
たかひりき えひうれしみ あくにむ  
袖と／＼ ふゆく霜ねむ せあらう  
月あづに つりねる風と あくせせ  
あまふう あきよそを傳る ひくの  
かいのうせせ

やよよせせ おひいやくと といたき あらのくわくは  
かうせ ふぐらの様め ながくと 猿波の歎み  
まくあめ なまのあまや おがきん れすくがよいのち  
さくさくべ あーせふあら おうづめ がくまあるく  
なまぬと おとちゆくため おとおとく おおまみがの  
くせまが おぐやちよと こうえはりも  
君がせよあか坂山のせよ／＼おがくれたまことおひじまく  
まのながく

ちよやがる 神かねとや なまくらへ 今をまわくよ  
うちじぐき 納采とくらふ あまきのめ ちく肺の山お  
山あじよ おもく日だふ あまめを あめとくらふ  
あまちよ あくねびきで おもくとま やくよまれる  
庭のあまふ もくよくめ おもくとま う／＼ふまくく  
あまの はりまく／＼ あまの まとひまく

さぐー佐るうね

七條店うせねひよる後よりみをあ

おまほみみ あれのこまる こやのちに まくまくまく  
いせのあまち ふねをぐくま あちーと よもむく  
かねきた あそびのをの くねあわい うねうがみの  
あぐねそ 林のりみぢと からだを かめぐちり  
きくきを なのむかがくく うりをと とあるものとの  
あたまと たふとてふ もれもって そくさまねぐ  
ちつうまれ あきつうつ よそよそそそら

旋歌

歌くべ

お後はもくとくすねくはれのとくにあらへゆたけのあぐ

く屋ー

春よれのまがはれをあぬもまひほよだなのうざきあわや

はる

歌くべ

おせはる門がよきとひる林までえあひんきりとある林  
ゑがきくらのあめぢたのう林をあれのあせをもく

旋歌

歌くべ

林のまくまくをまほきうぐひまのゆとりとひくもく  
ゆのあいろゑやなきとくどくくじくちかくすくす  
いくぞくの思とほくれぐらわくさひ志での田をもあまかよぶ

七月六日、たかむこのあらとよみ

いほくとよくとまだよあげて天のゆふとくや風さん

だいくべ

あつともよごほきみくにあけぬらまくづく林のあぐてふ東  
林のよあめきたてうとくねてあがくよはまむきとき  
あくくれを登てよたるよきくあついほまの人ら林までまぐき

まほく  
西船  
よし

松霧のをまきてくもればかひをまかのまがごみえがくね  
花とこどもむとお代が女たもうとあらよおれ石よねられ

寛平夜時。きさらの家の御食のう。

秋風よほとろびぬじめぢうまほじまきとよまうりぐにまく

あそ。またむとうける日。とおまのあめのくとより。風

のちとゆくゆきと。のみとれよ。よみてほひり。

今あぐくまのとれうのをなきだあう頃よりぞきひちまけ

歌くじ

いそこのみふまやうの神がびくたまよゑひご徳くみはる

枕よりあとうち恋のせめくまをせんぐくあいだととかくよと床  
あしきがたくわくとあまときけたまきとねもあそぶんちやく  
あまねやくとあまがたくわくひねばたまぶれあくままでをゑき  
みくの山のまくわくがみちひのつられあくは海よせん  
あらのやまだれをがつまきたつまきとほとよらゆきとまく

よく人

もね

ふらふ

ふトのねのたまね思ひよりををれかがたくぬむねくふりを  
はひよくほひよせねくかおぐくよのまくあいどひくとすれ  
人よあむつまあまきよれ思ひよまくとむねくまびよやけとモ  
寛平夜時。きさらの家の御食のう。

歌くじ

思ひよくとまれぬまがすくがらぬ山のわらじとあくと  
春の桜の志がきと学をのつよどひよとびくさのわらじとぞ  
桜のよはよあきくらのとくとくあだよとびくさのかひよとぞあく  
かくきぬの志がよからぬあをのれぬよやいあくぬ  
あとあくび思ひよとやいひよとぬをよめかせたまくすをあ  
思ひよ人のよくよどいたちくく料はみるよーすぐわ  
かりくども思ひよとのみよかせびいかやがわくとがよくひ

よく人  
貞文  
よもと  
三原  
よもと  
よもと  
よもと

おのれのまちりとすまごあるばかといでやんいちかぬまくと  
これを思ふひとがりとぬわくいはうる思ふ人のそれとがりと  
おひさん人などとありふ思とまよあそくやもくとあらけまやへ  
いぢゆるもととめむすとおきふとおうせうふとおひぬ  
くとあわよを候へんとあはせばおとおひらうほらてふや  
とおもつてが夕ハモるの泊をきやのがひぐくにまわらすてす  
うぐひまみとぞのやどりれふるすとやつまつぐのはきあらもん  
さうりよゑへくまねさまおとあくとよとくらをくらぬ繁  
あふとめとらむつよあまぬきびねぶらでにほきなうもせを  
きらうめすせのやすふこゆるとも、ちくまもと思ふあがくね  
えをきぬあすよれぬひまくや人のふとふとてことてやすを  
あふをあるなぐれをもはぐるべにうがうとあくたとくを  
ま先をきどあすぞとよくがくやの礼あれどほくせし  
ほりうの名のたけのうくむをすとすとひまをくまうを

平中興  
たのちの  
いせ  
まくせ  
くわせ

とこあをりうとくよ。すくとくのひりきを  
よそおがうつぶすとみよとびたじつとうにまぐらまく

歌くじ

詠きこととさみまくもやろこそとそひあがみねとあらめ  
ながきあるゆくたぐく朱ぬきびぬくづきのひだまびづれぬる  
あげまくとくまのくはとあらのくのうひがくなまくねくあ  
くふくこととがりとみかひとあらとあらととあるくふ  
育のまた生てぬると日月のつれくねくとあらととあるくふ  
くよとととまきびくとくままだあかひとびあよとまきと  
せのキおうせとたびごとくとおとあけをふらを答ことをほくうとまく  
よおせひとくとくと思ふんあらの人ようくみらるをむ  
候としておのうがくとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

さぬき  
大浦  
はな

よし  
おきせ

歌くべ

梅の木が生れたの後のみかきやまに物とのみ人ありまつて  
法皇す。あよちも一はたまなる日。猿山めりひす  
さくばどりふことと歌ふ。よすせぬひる

えぐらよすらあきそ是山のうひあるとよやあらぬ

歌くべ

せとひ木のとどに立下りてうはやもれあみのきぬと

大歎所

かほみやびのう

あくしもまねを下めふかくとをすとがくとたのきとうや  
孫川 繢日本紀下へはうへまつめよもうばよすでよ

あるきやまとまひのう

ああくやがづき山よみるをのすれく附かくがりやうりふ

あふみぶ

とほくあさなちくねをうねのせよたつぞくあらはねのよ  
えはぐきふす

えぐくまのとくのやうくみ妹とわれ、ねてのなけのまのうと  
志もれ山ぶ

志もれ山うち出て、舟船をゆひの鳥と飛くらなかし小舟

舟あそびのうと

とほくのう

舟がまのこむろの山のさりだがの舟のまよよおげまわひはう  
森やびかけど蟹せぬさうきのたちさうゆびき舟のまよ  
あれまくの舟のゆのやまと人ちのうがよ山くらむ勢よ  
え山すわかれあらじとやおかるすすめのがくをばせまく  
みちのくはあざものやあらわがからをまなきよりこをのびや  
あらごめいああおうづ里とをくぐりすねをこよきがひはう  
むる先のうと

さのくよひのくよは下約とあてあがくおとへがげとだよみん  
くつりのくうこ

吉柳とうことよりて草のぬみてふきひうめれそがさ  
まがさくあくまむのゆじかびよせるやを谷ののかとくやけき  
あめあい。承和のたぐの。まびのくよせあ

こすはりやくあせう山さりくみづくねいたてご承和まで

あれがちめとれほのくよはりのくよか

みのくよせまの後あたをすきてるよつくむよもげよまでふ  
こきにえまのほげのくよくうこ

ゑが代いかざりもあじあがたまめをかの枝くみほくじとす  
あきを。にわのほげの。いせのくよくうこ

あくのやがくの山よたてなまがうをとくやうゑがふき  
こせり。今よのほげ。あくのくうこ

東歌

くら

みちのくうこ

あがくよまよ霧立くもりわけぬとぞそとやじよそばまくほ  
うちやくくづくもあれどあやぐまの風うぐふのつみでくねく  
くづせきとがよやうてたがまのよがれのあひのまほぞくとくと  
とくろがれくつのこよのくたまを、やくはとよいざとくとく  
えまがくひくうたくまうせくやきのあひ下露へぬまくま  
わくみくわれべくぐくわくゆのいふくわくびあひの月がうと  
老とあきてあがくとくうかくばなれのね山あくとまえさん  
さがみうこ

あまくさのいをなちあじいとみつむやげぬよまかまくよせみ  
むたもうこ

ほくをねのまのまかげをあれどあがくかげよまかげほ  
づくをねのまねのまかげほ

うひぐもとさくやまとアドグリケルれおくよこをまくまのサウ  
甲斐がねをねづて山ざすを風とくふらがめやあづてやる  
いせくと

とみの備ふくまをきしをひあらなみあわせあはだとねてくらん  
ちみの祭歳のすりまのうと

ちちやぶるかさのやられむら小ねえ、代をとむまひりもくド

おき

家く称<sup>ニスル</sup>院<sup>ト</sup>車<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>、乞<sup>ト</sup>書<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>以<sup>テ</sup>筆<sup>ヲ</sup>滅<sup>タル</sup>、乞<sup>ト</sup>別<sup>ト</sup>書<sup>ヲ</sup>

卷第十一 物名歌

をぐくー

そまへんあ本<sup>ト</sup>かくドあー引<sup>ト</sup>の山のやま<sup>ト</sup>よびと<sup>ト</sup>もふを  
在<sup>ト</sup>下。お<sup>ト</sup>岸<sup>ト</sup>上

かうてとあよそ<sup>ト</sup>なまのま<sup>ト</sup>をさんかくやのほとあまふ<sup>ト</sup>わと

さうごの本<sup>ト</sup>支<sup>ト</sup>利<sup>ト</sup>下

くきのちむ

赤財<sup>ト</sup>、ひつときひ夕<sup>ト</sup>くれめがりうげ<sup>ト</sup>のみくろ<sup>ト</sup>とあうぬ

貴<sup>ト</sup>文

ちまのぬ、こやう<sup>ト</sup>よ

おきのぬて身<sup>ト</sup>とよくよりじかき<sup>ト</sup>みをとま<sup>ト</sup>のひられあ<sup>ト</sup>を

からこと、清<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>

そをど<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>と

うちもと<sup>ト</sup>よも<sup>ト</sup>とのう<sup>ト</sup>のうれゆく<sup>ト</sup>まのあをたうふ<sup>ト</sup>みとふ

うお<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>みのをのう<sup>ト</sup>との<sup>ト</sup>そを<sup>ト</sup>ど<sup>ト</sup>のよう<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>みふ<sup>ト</sup>

つまゆ<sup>ト</sup>から<sup>ト</sup>財<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>ある

卷第十二

ちく山の萩の根<sup>ト</sup>志<sup>ト</sup>のぎふ<sup>ト</sup>重<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>下

くふ<sup>ト</sup>とあらふ<sup>ト</sup>かくねのなづ<sup>ト</sup>みよかくらば<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>す

つまらと不あふさうかの志のよきをほさんせむぞたるうね

卷第十二

ことひくもあくよとひもさだの下

いねぎのどとの山すいはやあいとあくよこびみりくはみ

けを、あらへ、あらめうらどの、あふみのうれやよね、ると

返一

やすくわのひとをの歌のとよにのちうぐにうこひめやと

うれえ

卷第十四

かひてふとのをのとやねとへて下

ひとくわをあわの、ひとまわて、こらどとこひなてまうりて

くわせこぐくざとひあをけ、ふのくをのふすじかねてまう

除古又、ゑととたがあづけ、むあとをもむ下

そをくわせとみゆうむのほの界なむかひとまきま

つまき

古今倭歌集序

紀叔望

夫倭歌者託其根於心地發其花於詞林者也。人之在世不能無為思慮易遷，哀樂相變感生於志詠形於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懷可以入發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於倭歌倭歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鳶之轉花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌謡物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情欲無分倭歌未作逮于素蓋鳴尊到出雲國始有三十一字之詠今反歌之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以倭歌通情者也爰及人代此風大起長歌短歌旋頭混本之類雜體非一源流漸繁譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮天之波起於一滴之露至如難波津之什獻

天皇富緒川之篇報太子或事閑神異或興入幽玄但見上古歌多存古質之語未為耳目之翫徒為教誡之端古之

天子每良辰美景詔侍臣預宴筵者獻倭歌君臣之情由斯可見賢愚之性於

是相分所以隨民之欲擇士之才也自太津皇子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵移彼漢家之字化我日域之俗民業一改倭歌漸衰然猶有先師柿本大  
夫者ト云高振神妙之思獨步古今之間有山邊赤人者並倭歌仙也其餘業倭歌  
者綿綿不絕及彼時變澆漓人貴奢淫浮詞雲興艷流泉涌其實皆落其花孤  
榮至有好色之家以此為花鳥之使乞食之客以此為活計之媒故半為婦人  
之右難進木夫之前近代存古風者總二三人而已然長短不同論以可辨花  
山僧正尤得歌體然其詞花而少實如圖畫好女徒動人情在原中將之歌其  
情有餘其詞不足如萎花雖少彩色而有薰香文琳巧詠物然其體近俗如賈  
人之著鮮衣宇治山僧喜撰其詞華麗而首尾淳滯如望秋月遇曉雲小野小  
町之歌古衣通姬之流也然艷而無氣力如病婦之着花粉大友黑主之歌古  
猿九大夫之姿也頗有逸興而體甚鄙如田夫之息花前也此外氏姓流聞者  
不可勝數其大底皆以艷為基不知歌之趣者也俗人爭事榮利不用詠倭歌  
悲哉悲哉雖貴兼相將富餘金錢而骨未腐於土中名先滅於世上適為後世

文粹無下悲哉二字

一本顯下有  
伏惟二字

被知者唯倭歌之人而已何者語近人耳義慣神明也昔平城天子詔侍臣  
令撰萬葉集自爾以來時歷十代數過百年其後倭歌棄不被採雖風流如野  
宰相雅情如在納言而皆以他才聞不以斯道顯上  
陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外惠茂筑波山之陰淵變為瀨之聲寂寂  
閉口砂長為巖之頌洋洋滿耳思繼既絕之風欲興久廢之道爰詔太內記紀  
友則御書所預紀貫之前甲斐少目凡河內躬恒右衛門府生壬生忠岑等各  
獻家集并古來舊歌曰續萬葉集於是重有詔部類所奉之歌勒為二十卷名  
曰古今倭歌集臣等詞少春花之艷名竊秋夜之長況哉進恐時俗之嘲退慙  
才藝之拙適遇倭歌之中興以樂吾道之再昌嗟乎人九既沒倭歌不在斯哉  
于時延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等謹序

文粹哉作  
乎

序の初よりひよんを顧み乃ちよりひとんとありひとん心  
ありてすえねと人う乃ちそれひよんをひと人のよみ  
まとねまことにひとひよんと書いてかまとにひよん題面  
あり。作ぬ

集やのよも書家筆葉うち佐朗称すと細のよも行ゆ  
數多けどもとくくへりきしは細とひば例より  
一本の草木をその皆ことそぞれあり。作ぬ

序れ中を金乃不輕きまた秋の風をそへまれるあは朝と  
おと乃様に引ひきあはされ後の人のほへあるれど  
是も今の本とぞく望とハムにせよみ思われますに  
乃様うすしてを作ぬ

序比中細字よもせ紙ハ是文を義抗すよも後ア  
」れさ。あきれと本の例もをあくす様ま作ぬ

序比中花をそぞと乃細或況よハ花がふとて乃

何やまうとひよと後権毛集の序を考られハつ花代  
りてあるゆのゆであの二字蕭さんとアくめまと書  
そへんもはう一聲あれい是も又を傳ふとすと  
つとよ後拾毛の序を行ふとそのやまうあるくま  
やをあくまぞく

序の末まうと約はくは。たわやまをあくす。四つう  
あれとあれも又とつにまろーとあく。作ぬ  
すのちよこれへまくのとあとわすきうら皆後ノ人の古  
流するあれとのうくに

修勢あ語よせをあすれ初方例もひよと長方もあまこを  
そへいせあくすを古今集を書きとひく人乃け  
集の中よすすむあるをそれと持めよかこれも乃しき  
墨け一はあほの毛をそのまの上すあとをもとをも又今の方  
まにとて改めに

かんれいせりひよし乃くんれよ書わくめ又のきうひと  
古今集の一卷乃單にそくとてやまうとあうまん  
則去あくめ或ハいつきのやもゆくがくまよひまうと  
かくほくにあく作る奴  
ことしげをあくに本に多う作らん清とゆもあくぬうある  
すあくの後あくそんよみやまく心もゆりつ支流など  
すれはまふこうをもじくあくいさとかすをもじく半  
そもふもあくたゞし俗金りふをとあくとゆひりふ  
人を行んうつ病へう車

牧田菴生

延喜五年四月十八日出版  
明治十八年九月廿日反刺御届

奉勅

選者故人

紀

貫

之

校訂者故人 蚊田倉生

原版主

大坂府平民 東京府平民

岡田茂兵衛

出版人

江島伊兵衛

墨稿區通四丁目十番地

